

早大ラグビー部が地域とスクラム！

7月5日、早稲田大学ラグビー蹴球部と地元上井草の6町会が、「災害時相互援助協定」を締結しました。上井草には、早大上井草グラウンドがあり、その一角にはラグビー蹴球部寮があることから、いざという時には、ラグビーで鍛えた肉体と精神を持つ、学生と地元住民がスクラムを組んで、災害時に備えていくことにしました。このような大学のクラブが地域と防災協定を結ぶことは、全国的にも珍しいものです。

大正7年(1918年)に産声を上げた早大ラグビー部は、2018年に100周年を迎えます。紹介するまでもありませんが、この間に数々の輝かしい成績を残し、エンジと黒の伝統のジャージーは、多くのラグーマンの憧れとなっています。

この早大ラグビーの本拠地になっているのが、早大上井草グラウンド(上井草3-35-21)です。およそ130人の部員が、練習に汗を流すとともに、その一角には部員の寮が整備され、40人が暮らしています。部員たちは、日頃から小学生のラグビー教室や練習試合の観戦などで地域の住民とも交流を続けてきました。グラウンド周辺には、6つの町会がありますが、こうした交流を通じて、住民の多くが早大ラグビーの応援団になっています。

一方、平成23年3月の東日本大震災の発生から4年が経過しましたが、今年に入ってネパールや小笠原での地震、口永良部島や箱根山の噴火など、首都直下地震への備えを改めて考えさせられました。上井草自治会の鈴木定雄顧問と遠藤強会長が、早大ラグビー部の島田陽一部長に、



いざとなったら地域で暮らす高齢者などの救援活動に、部員たちの力を貸してもらえないかと相談し、大学の単体のクラブと町会との間の防災協定締結となりました。

7月5日、早大上井草グラウンドでは、毎年恒例の「北風祭」が開催され、大学関係者、地域住民などが大勢来場。早大ラグビーを支えてくれている方へ感謝を伝えるイベントで、部員との交流を楽しみました。そのまつりの合間に調印も行われ、6つの町会とスクラムを組んで災害に備えていくこととしました。調印式には、後藤禎和監督も立ち会い、「協定のあるなしに関係なく、災害などが起きれば、地域のために力を尽くしていきたい」とあいさつしました。